三七全

# 南柯夢傳

後編

七

1曽a
600
224

600
224

三七全傳
第三篇

# 白夢南柯後記卷之七

後帙第三

東都　曲亭馬琴編次

## 天神川の淙

さても又天神山の名ゝ負ひて。科なき科に釀とるゝ。されぞカ冶
手七ハ風流士の大刀を取らんとて。その夜さり同樹と共ゝ。忙しく
宿所を出ハ。成の初更ゝ。元来伎倆ゝ。同樹ハ
手七を誘引て。小俣へとて出よられど。縣正の第宅へハ。ものどとゝ
らるゝ所あり。彼処ハ阪の多く。老の足ゝ。術なくなんどゝひらゝて
途ゝ。ゝ時を移して。天神山の麓ゝ。この地方
右ゝ高山嵯峨として。一條の谷川。その裾を繞て。左ゝ茅竹猗々
たる。百仞の蟠龍路程を遮る。夜風袖ゝ入て夏なれどゝ。

明月峯をたゞれて白昼に似たり。里遠き小篠原裳濡らして
ゆけども〳〵程なき。羊七ひとりにてねぶたがるに。同樹を呼とめ是い
ずこへか行べきぞ。小俣の郷へ行べからんと。弦を捨て手を取り。
あらぬ路の便宜なるべし。夜もそやけて深くなる。猶途に滞て
小俣へ赴く。熟寝て人の門を敲べ。暴小宿所
を出ん。何と安らん宜しからん。言葉の本末あぶつるに。野狐
の憑きたるの欲さらどいはまりよこてろを屈して。老耄やたゆひ
けん。けゝうはあらどさひらぐ。五倍の郷導さるべとのひつ先へ立ん
とすを同樹い疾視つゝ冷笑ひ。齢七十かはまんども。物ひとつ忘
たることなし。ある夜行い常よまるれど。銭百脱して狐狸に自毛数る
同樹はいはらど。汝がゆ〳〵方へ沿ゆるねとて。親をば嘲呼をるの欲

人の齢の傾くたるこそ。世よ朽をれた物いるゆるゆる由縁を由縁
小ちられて百日近く夫婦を頼ひ。孔を続し名を続し。さぶく
よ命労て。峯句の果い嘲呼をられて。腹たしゆだるさるなろ
しのゆとたらべ。腰もえてくね借銭負ひは。味噌塩よ追れいせ。和
主小俣へゆんとゆらべ。独ゆれねとゆらべ。踵を同じ今未し
路へ立帰らんとたりしゆべ。羊七慌忙つゆ〳〵袂を引とゆゆ。ろゆゆ
小ゆはゆれゆて。俄初の言の禁ゆ。腹たしをるこれゆゆ。語
殊さら小夜も深しるゆ。羊七ひとり糸りてゆゆ。室力を遍さる
ゆゆ。ゆるゆるゆゆゆゆ。ゆゆゆ。懲じゆるゆ。羊七が身小ゆ
て。俄ゆくゆをゆひゆ。枉て小俣へ。侶ひゆゆ。勧解ゆゆ同樹い頭を
掉ゆくゆゆゆゆゆゆ。ゆくゆゆ。宅を出ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

更たれば今宵はもはや。其処放さじと。焦燥て。振とる袂を赤引
とめつゝ今宵は深しとも。大刀はお花と引うえの約束ふかしとや。
たゝらば今宵は延さんなど。物は由断よ寸善尺魔。只の一度も羊七が
ものゝあらば許し給ひて。小侯へ伴ひ給へと。賠謝るを聞もあ
りつらんと。足ふこ鳴らし。臀を打さて苛い長脚蚊うるゝ。ある処よ
立在べきまも足のふれめぐる。血の気の薄い老人が。血を吸はてたまる
物なれ。ゆよ羊七。うゝ小侯へ。来るとも。縣正より賜はる。證文をもて
ゆべい容易大刀は遍なゆべ。さて忘れたりとも。喰べば
羊七い懐る畳紙はらい探りのみ。證文い某が懐中よひゆとのひぼく
猶ゝ。うり出べそれをうんとよと。掻取るゆ。披れも果ぞすゝよ
引裂捨れば羊七い吐嗟とだらとうら騒ぎ正しく。太刀と引ゝえよ

とて。縣正ゝうゆ。證の書を引裂ゆい。酔狂狂乱ゆ行と
ちんとだらりよ呆れて臀居よ撲地と坐し。遺恨の涙よりれ眩たゝ
同樹いさゝゝと歯茎をあらい。足拍子をとゝうゝ。呵ゝとうち
笑ひゆよ白物。この證文が何よるべれあまり念ひがあそ色さり。
一件をのゝゆゆん。縣正の汲引をもて。お花を陶殿よ進らせて。
その代よ風流士の大刀を賜るゝんどのゝ。ゝゝ悉虚言よゝお花
を花街へ沽却す。その身價を引ゝて。九十餘日食しゝたる。飯米
の盤帳を堺めゝる同樹が較計ゝる影もゆれ浮浪人の羊七が
食ひ荒ゝ。お花を頭へ進ゝたりゝゝ。室刀を和郎よ賜らんや。
ゝ物をゝゝゝよ主の大内殿でさへ。彼大刀ゆゝよ滅亡せゝる。
況や和主が分際で件の大刀を取らんとゝゝふい平城の大佛堂の梁を

蛾ゞひろんとするよ仙ゝ。ゆゑ。ゝ。ゝ。ゝ

されんやいと嗚呼と歎ぜば侍僧あるぐら踏て原に武士でも諸侯でも大臣摂家の嫡正でも今つゐる所に素浪人りのまゝ同樹がるとなれば泥濘を戴ぎるを過分とありのて面拝せるに力の靭ゐまをあけて和郎に親を何とする親を殺せば竹鋸の頭の根を挽るぞと足りて肩を揺動し親とりの稱を受る著て罵つ呼ぶつ蹴つ踏つ打悩さる羊七が単の衣も破れ口堪忍袋の緒も締めへど頭髪も共に弗と断て髪も乱れたふてびと打んとふり揚る同樹が拳の下に潜り腕を取て刃を起し假ゆる親子の義を結べいのべたうをえもいだ忍ひのまくある拳い受たる且く彼処へ休ひゆへとのひもめつど捉てる腕を脊へ揉向ちらふまりて歎ぜば十歩あまり走りつ川辺に掛たる稲塚に

忽地磯と衝あられば裏より見かと内く双に同樹に偶砕著られ苦と叫て俊僧を倒しも果ど稲塚より素ゆるまを伸て右まある川へ水入と突入る安て稲塚に被たぐ羊身をあらと了。双の鮮血を拭ひつ腰ある靴に納る形勢とうろ〳〵と羊七に月光にとうんあうえれば嬋娟たる婦人あり〳〵疑ひ怒ひつ樹立のかゝ身を倚て旦くこれを窺へば件の婦人に徐ゆ小安さて袖うち掃ひつゝと立在るぞ。ゆうありけり羊七に樹蔭を出て跡に跟そに何人ぞと問うる。声に忽地えうに顔をつくとえて亦ありどろ〳〵こに妖御前にをいさびゆと問ぞもあいどまを抗て。あるる音高と推禁め立るぐら耳語つ又まを抗てさ〳〵招ひば痛した嬋姫に露に宿り風に揺り。途の疲労にたゝして撒薬の

同じく樹を切り倒す
羊七
あつう
あんど白状
四九六
同じく

あつう
羊七
入王
攻

あるべきこと。歩みを止めひしゝとぶ。お通い稚て勇ましき冊紀幼女をいざ時
兼洛へめぐりめひしゝとぶいかゞ知召さるべし。これいとらいが才ある。
半七よ行り。とやうせい。槐姫商しゝ。波風ちゝめる世のたぐとちひ。
をしゝらぬ才を存命と不思議よ面をえらるゝと宜へば半七
いあん前よ畏て。故のりてこの春より本例よさそらへばちのびゝよ
あん往方を彼此と索なりしろひゝてゝらびも半七ぶ。今宵の
危窟を蛛よ救われ。姫君の恵るた愛る顔を拝ゝまゝこれとぶ
武運の竭ざる呼ばびられよりのる。直よ宿所へ伯ひとゝ
せ憂まゝわゝい復ちよ。訓慰ちうんべゝ。ゞざめへとゝ才を起い。
お通い姫を扶掖ゝ主後二人月を燭よ氷上のうゝめうんとすれば。
りの祝よる左よ右よ一反ぞうんと引ゝるうんと車を跡のの四五六全奴。



尻ちらりける松が根よ。煙草ゆ売を干とちうれゝ。落人ゆらゝと。
四五六ぶ高ちよ呼びゆゝる。声ゆひうゝぶ半七い。腰ゆる刀よ抜出
しゝ。ちゝしと打ば才を引ゝ。拂ひ落ち煙管の小大刀。行ゆゆ
ちび後方ゝ実父外祖の讐敵ゆい脱さゝと全奴い下駄脱捨て
松蔭ゝり。走り出んとする呼をお通い吐嗟とうりつ。洗視よ
打并を丁と受たる桐の下駄。ひとはゆ落ん夜の風秋を騒よ
夏の霜隈ゆた月よ主後い。偽んとすれど偽びゆへゝ。ひとゝ術
ゆゝうえゝよゆり。

過去の菴主

刀治半七いゝの夜さり。天神川のほゝりゝゝ。ありひゆうけゝ端
お通ゝ。同樹を川へ砍流しゝ。危窟をゝ救をたれど。一旦親と

憑しきの縦残忍のこころかな。これよ飽まで難面なくとも。
眼前よ殺せ殺せと却心よ快からぬ。後日の崇も恐くけれど。
既よ槐姫よ環會をまれば。この日未の本意い遂たり。主を忘れ
るるよ身の狭危いとも。全く四五六が虎口を脱れ。
姫と姉とを誘引て。跡を埋めて間道う。氷上の郷へ
立帰るべ。丞三のこころよるう。些いかちみてうべ門の潰を
固くして。行燈の燈口を掩ひ。敷居のこるふかぐりあそきん
せう。羊七が今此ざ多よて。遠くさそこらひゆを。姉いさらく姫君も
さそそて。怪しうあびすらぬ。その後よそそうさえ。さそくも陶
晴賢が逆乱ようて。義隆義基殺まれぬひ。金を積玉を変たる。
紙屋山の御所一炎燼とるりよければ。姫君とても恙るる。脱ま出ぬん

とありいれど。御寂期のせうをもゆんぐやとて。女房お花あり共よ。
周防を投て張たちしん去年の秋よりひしゆ。沼多の新関よ
抑留せられて。少みもあられ月日を化よるる。やがてこの春斗藪
の女僧が好意よて。辛くも沼多の関を越たの地よ年来住居
する力治同樹といのいが花が由縁あるふつたて。夫婦こふ身
をうけ。商賈よさくるりさぐるしも。姫君のかん往方を尋まれ
て。且風流士の宝刀を索て。牙の慎を嬢んとたりのようひる死夫
婦が薄命。これより同樹よ詐欺まて。今宵よ逼る一瀬の
浮沈を祐る神の名よ。貴の天神川のほとりよて。環會なる。
幸これよ何ぞ。さん去歳より何処。みる堅たる。又何の故ぞ。
危を忘れ忘ひて。この・こりよ呻吟ぬひ。公りとなひと

牙の憂ふを搗きぞく。訊をれば槌姫い落る涙を袖もて拭ひ。
定めなき世のしるべをもひ老僕家人よ囲を棄て。こゝ留君艱
父君呼夫さへ墓るゝ。もへば存命べくいとはれど。通がてゝるゝ
禁るあら。形なる世を忍びてをり。女僧よるらんとおくども。これ
をら大和よ在きん。父母よ今一トゝびあえてとそと諫られ。水の
上をゝろつ。住ひ方へゝり来る。ぶ苦ゝさ推てもられ。ぶ牙ひろ
の故をりて。羊七夫婦よいゝぐらゝの。艱苦を被るい不便るり。と宜ひ
ば。物ゝびあん目を拭ひめへば。羊七い呉額を著涙よ面を汚も
あぶど。お通もさゝと推量る主と牙が歎たのゝど。憂よて
りれね袖の雨かるで簷ゆよ晴間もつ。ぶれすれど気を激して。
牙が方を倩とゝん中。ゆよ羊七。和殿夫婦が伶俜たゝの里へまゝる

ゝい。故のりゝゝやられども。音耗ゆえんゝるゝてゝらゝるい似ど
黙止たり。さても去歳の八月廿九日。館よい義隆あへるゝも大寧寺
あゝ自殺まゝゝゝ。麻の如ゝ奏れわゝ人のひよ忠るあれど。
逆賊ホが鋒鋭ゝ。鶴峯さへあゝさられて。姫君よ冊くりのい五侍と
仙野呂東二のゝ辛ゝ囲攻ぬけゝ。澤川のほゝりまゝゝ。延ゝ
きあらたりける折敵遠間もゝゝ追蒐来ればゝ呂東二籠て取て
還ゝ。且ゝ敵を拉る間よ龍顔い脱ほけれどゝれゝり主従呉
ふゝを昼い駆ひ夜い走り。東を投て赴ゝ得ゝ。ゝ身の秋中安
藝國沼ゝ多の本郷よ関を居られ。進退ゝよ究アゝねゝ。ぜんさゝるゝふ
いよゝる草葦よ牙をゝゝ。姫のゝへを説たゝ。ゝもゝも。ゝが
程潜ゝゝあらゝてゝあれと憑ゝよ。菴主い老ゝる女僧ゝゝ。ひ

あひ〳〵のたれて。ぜつて。姫君を舎藏進ら。さていのやう。白雲流水の人間生前の逆旅まうく。花落ぶかい貴賤老幼の栄枯了育〳〵。ある乱世よあひ。いろ〳〵女僧が柴門へ金枝玉葉よりはへたる。姫カ称たちの素さん。今更よりぶうくを。隠匿をべうもあらど。老尼ハ昔大和まく。風流士の宝刀を拭損じく。罪被るべありしを。蛾松ゆ〳〵よ赦とたる。カ治同樹が女房。小田井といふのよ。ゆ〳〵。さる慎たのだ。たる夫ハ京よ往どるりて。いつけるた孫を棄周防の永上よ赴たて。幽なる世をうるりのやら。僻ゆのこいやまぜが世間ゆ〳〵形なる。こうよ。ゆ〳〵夫を諫難たるられを菩提の種よ志て。明白よ暇をこひ。十年以前よ離別そて。此二ぐるを所縁よはき。ちゆ小幕成締てゆのりくふ。月も安く。忘よて。年紀経たて。

今たて。くも由縁あり。蛾松ゆ〳〵の主ゆりける。続井家の姫君の。先途を救ひやらるゆ。ぞ離別の夫よ代ア。て。舊恩を報ふ。ゆたて。ろ安く。思ゆ。信ゆて。諸らひ。愛ゆ。ゆが女児のゆ孫のゆて。涙と共よ物ぐられ。ぐ憑〳〵も又衰ゆ。ゆあがえて。主後袂を濡ら。て。ゆ。て。ゆ。ゆ。ゆ

宿をこもとけれども。こゝろ〳〵怨敵の間者歟と疑ひ。ゆるさず。
頃日菴主い如此さまよて。重れ病よ臥たれば。宿いかねるべどいとも
難顔推辭〳〵。行脚の女僧つゝ〳〵と声を吹裡を見入れて。さのみ
ものいか通すらども。ゆれい平作が母園花。こゝろいつき夏山よ伴なり。
といふ声いその人ゆれども。面影いその人ゆゝ。後方ある女僧が脊小
屋へ来てゝる雅児い。平太郎よ平あらんぞらんと。ゆゝどもたひ難て意も
えすべまりてをり。当个女僧い遠〳〵。後をとれあゝ〳〵。竹嶺よ
尻をとゝる。ゆく面影の変〳〵。名告つもるれ疑る。視さもあるべた
ゆんゆん。ん身ぞ小猫びて在さい。擬地も恙ゆ。をゝ〳〵もんとゝい猜〳〵
たゝゝぞうゝつぞらよ言んとゝゝどゝいあゝゝ小端居ゆ。詩〳〵と
いひゆぞら。後方ある女僧ゆゝゝ。細代盗をゝい取る。草鞋を脱

とれよ。ゆ〳〵その人ゆゝとゝいゝゝ。ゆゝ。何の故ゆゝ面を
焼頭をべ剃ゆひ〳〵。こゝ〳〵いふ。とゝゝ騒く。猶苦さゝ父のゝ。才の
うゝゝゆゝゝゝ

らねを送憾らひもやめ。彼も痛〳〵とものひまるごろ。彼
びとの秋をうらねど世ハそやあうとと視されつゝ。ものも
妹夫の縁を八重締しゝ。姉れ前を苦めらる。因果忽地廻
来て。めるる難れよめのやめらん。この世だよあの如し。罪障いまぐ
滅やぶ。後世の艱苦をいろで脱さん。されがらの身の暇を乞て。
女僧よるらぶ。どのようぞ夏山も又りろうもよ。菩提の道へ
入らんとのこれも又ぢりうれど世歳よるるやうらぬ身のさそ
あばつうるれ出家を遂るべ。世の胡慮とうることあらん。賢人の
ぶるることあり。出家い民出家の後の出家を堅固小遂ることん。
一旦の憂より堪ぶ。衰こめまりて世を捨るうも。老ぐらぬる身
ゆめらぬべ。人も許さどうれゆ又志の移ろよ易〳〵。愁容を変

ぞとも兵平太郎を孕むを。身の勤とすゆへ。吾倩い齢も傾れぬ。
且半之進どのよりぶ姉ちそ正嫡なれば良人よ暇をたて。
今ちや出家ちゃうれば。ちゃ。笑ともせず。呂ひとぞ
ゆひねと可嘩よいひ諭せちゃ夏山親を改めて。この母又の宣ふ
みとも覚ぢらど。年弱ちゃ。捨る世の行ふ難れるの仏らん。
母れ前よい良人ゆり。齢五十よ近けれども元来人よちぐまたる。
縹致ゆそちゃもせば四十のういまぐ超ぬ。女房とそ人もてゆ。
ちらいを既よ良人ゆ。貞女両夫よ見えぐと。幼稚れ時よ父母の。
いひ教ゆひたるを。今更よ忘れ。ちゃ。ちゃれば母ゆ。ちゃ。
こそ出家ちぐたりのよ仏ちと回答つ。さて嫁姑ゆろ共よ親と
良人よられを告身の暇をゆらん。とちぐちらひも願ゆ共親も曾太郎

良人も半之進と許ゆ。ゆらぐちて平作が初月忌の逮夜よ當りつ此
夕ちぐ宿所よ親族ゆ集會たるその席上よちて夏山へ父と
外父とよちゆ出家のゆを日未ちり願ひなれども許ゆ
ゆらぐ。ちゆちらいが年ちりれば。ちく未ちりとゆそ。許されぬゆや
ゆらんぐちらん。ゆそ親よちるりのよ仏ちねど。又そのちゆるれ小仏ちぐ。
ちゆそとも。ちゆちゆも呂ひ定めをゆちぐちらよゆ止ぐれられと疑念を
ちれたまへ。とのひもゆつど。爐の火の中へちらぐたる大取の柄をちゆと
取ちと。

・花い根よ。ちらいちゆ生ゆぐちつひの薪と才をちゆまた。
と諭ぐつ。烈火のぐちよ焼ちりける火取を顔へ推ゆれば。ちり
忽地發と立ち。一声苦と叫ゆゆつど。仰さ多よ倒れたる吾倩

この秋勢をうけてうれも又ある志いあるとうぐら夏山よ先せられしい。
生涯の不覚なれ後まいせどと決取をとわらそ。
桜木をくぐひび後の花もるし。死出の山うぜいぐあいあけ。
と詠ども果ど火取を顔へ推當てあるともよ倒またり。さる行よ
親族いくく騒うた騒だて。さ多ぐふ炊抱せられしうぶ。せ人ぐ〜ち
つたたるよ佛芽の冥助やありけん。夏山ある吾倩ある。顔ることよ
ある煩きよけれどつ四ぐるをも痛ことを痛ぐ。当やるぐ呼天ぐるぐ
兄をうんうく。蛾松ねうんあつや。彼ホ刃を捨く出家を敢へ。
勇猛堅固の志賞ぞるかあまりあり。陶晴賢が逆乱以来。二十昂小
及べども。梶姫の生死存亡今よられをたるうなられば。つぐ君侍夫
婦のといろう。ぞ苦くあぐとめうさるわらよ。間諜者を遣して彼

地の為体を探ぞ向するよ。安藝の沼多よ関を居て。周防の
ぬくに入ることを許さど。たれども尼法師。その沙汰を脱まて。往還
自在ありと少ぞ幸あるうなよ。園花夏山面を焼て尼とるらば。
うれ敵沈へ起れて。姫の在所を索るとも。誰ぞ入られを認るべた。
良人よ代ぞるよ代ぞ。彼ホ大功を立んよ。この時ぞらぐ何日
をる期ぞん園花が出家のよ今ぞ。任すれば夏山が刃の願も
諾ひなまへとのられ。ぐるぐ兄莞ぞ。兄ホと打笑て。いのるやなが莞が
出家成立沈よ許とべし。彼ホ面を焼とめいぐも。痛るれい顕奇く
らく〜出家を遂うとこの夜更請たてうける。老僧を導師と
しく戒を受髪を剃吾倩い拈華夏山へ微笑と法名あいぞて。
宿志を果とのそらぐ。ある大ゆのあん使をうけあるうぞ今東小

哀の中の飲びなれ不幸の中なる幸うるのとなれも呂ひ人まもの
よ。猛き行の装を整へ次の日いと早道途せんとするほどよ
・ろぶ姉い昨夕ようろ呂農泣くをいせ。ながらのとれひの堪がうと。
落る涙を拭ひもめつぞ。恥しき妹ぐひよ。年未夫とひとつよをれど
憂いの母ようろ呂ぶるのうへ。ろ呂ふるのうへ。ろ呂ふるのうへ。ろ呂ふ

たるに物ゝと稱賞し〳〵いと喜びよろこぶべき所夫も呂
賞よ夏山を可とし〳〵。寄せるよ宜しの事。仙野呂東二取て返
し〳〵。姫のあん往方を索とのべども。彼関よ留られるべしとも
又憑まし〳〵。汝達いふ〳〵。槐姫よ環會をし。関の須の
用くやぐ〳〵。潤せやらせよ。安藝國高宮郡多治比の郷の
地頭職大江太郎乙就い僅よ三百貫の主るれども。彼人名家の後
し〳〵。勇敢武畧當時よ秀兵。その才祿かく。弊の微なる故よ。
晴賢よ隨後し。逆賊与黨の志を見ととのへども。裡よ大内家の
厚好を忘ぜず不意よ起〳〵晴賢を滅さんりのいこの人なる
べしこれ又殿よ味方あげて。竊よ大江家よ諜ぶあり。槐姫のれ
ゐよ逆賊を討滅し〳〵。大内殿の怨を復さんこのとあり〳〵。



秘て。縁をもとめて〳〵大江家へ便らび後よ翼を沿あんとうたよと
説示し。送るもゝ〳〵も袖よ露。ならひもめへぬ浮世の塵よ。まゞ所
道者ハ親よ三人。り工成らどいられぞこの一生の列れ。と思へば足も
すまねど志を激し〳〵。兵農よ出を急だい〳〵宿り〳〵て中ゆよ。
けふ〳〵も彼処の剣を超西条の〳〵〳〵赴くふ忽地よ途よ惑つ
浮世よ遠ゝ柴門よ宿を乞がらひきや。姫の隱舍るらんと見ハ
親るゞ誠心を神と仏の懸き〳〵導たのものと首尾を演
めへハ夏山比丘尼も涙の隙よ平作ゞ寂期の光景物ゝ〳〵〳〵
うち歎くおるゞ宿〳〵の袖ちゞ晴〳〵うるゝ一家の親彼世
この世の才がゆ外母後才女の変とる面影〳〵ふつけ宗つけ。恒のふく
塞ゝて又慰んゝぞるゝ。縡の越を霧ゆの槐姫ハ忙〳〵戻風

の背より走り出園花夏山両女僧さても雄とし見る公操感ずれば
るわあまりおり故郷を出海山凌ぎ花錫行脚の難行苦行も
なるとれ故と申くくとたわけの樹面いと恥〜勲よ生残るとく分
を苦めあ又人を苦めつくその罪を造らんとすと只速よ自殺〜
く冥土よまーまんとうが所天よ公操をあらーばらんはとそも
大和なる親のあるを捨受ぬばつるのいとと許されば拓華微
笑が弟るとすとけのようぞ入る仏僧の法のこちびたーくたべと
うれ口説づく位あへば宝を花の尼勲を慰めれらろの中推量よび
痛しと限りるとれども出家のあいまご遅るど女僧ホが〜
末る途よ〜人の密記語を申くよ去歳の九月二の日大内殿の
郎君入花水山の御所よあいくく自害まくく。猛火の中へ入のかと

世よあいをさ〜いのめれど竊よ助けまるくあるく。我基今よ恵
あ〜ふく濡て在まんとのつりこのあり〜実夏ならば出家入平ホよ
ばら月陶五郎が挙動養父晴賢が悪虐をたとるよ似たれば。
その底意いるよあるらん善悪ものあらんとさるべよ慰めまわらされば養主の老尼いと重れ病苦を
忍び〜分を起〜原来行脚の尼前ならば蛾松ぬの息女く。
孫女まくをいるよ寛よ不思議の縁あり〜去歳の秋ら。槻
姫主後を舎藏まわらと吾倚ハ刀治同樹が妻なり首尾を
留様〜〜と昔を今よ繰〜〜るとうへを説ちしたれも夫ハ
のりるばら。ま〜も菩提の道よ入りしぬの容ハ仏たれども。飽も
あるれもせぬ夫よとろれてるの道よ入る尼前たちの公操ハ。

いと有がたく仏の如し。尼が老病身に逼るに、終焉も遠からじとて、
ときの菴忍地に無住とありて。槐姫主従の者をあわれに
便りらんに是のみ苦しかりしに、今ときらんにも此の菴を守るべき
人を獲たれば世の疑ひを避るに堪たり。尼は往生の素懐を
遂ぶべ。拈華尼い後住とありて。明白に彼行しめこの地の人気い
如此くに。面様くとあらもあり。信者に説示せば。拈華比丘尼大に
驚びさそい父が前妻の後妻女なりしと聞えたり。刀冶同樹の女房
まくをいせ。弥蔵縁らに喝ぜ。新尼ホが師と仰ぐ。実に不
思議の対面なりとて。その夜い通霄話りあかして二人の新尼
同宿と稱して。爰を奈良に湯を突鳴らつ。日毎に三原
尾道に出て。券縁しある時い甲立多治比のあさ勘ねて大江家の



虚実を探り窮めるどする行に。その時の暮に及びて。菴主小
田井尼迁化したり。豫の遺言に任して。拈華比丘尼後住とありて。
更に拈華菴と号して。微笑比丘尼に共に。日に市へ出て券縁
をなれば。近在里人あもられを疑ひそこに後住を勧て。小田井
の道場を相続せしとのひめ。さる程に春立ちて。弥生の中旬。
有一夕ふたりの新尼い例の如く券縁して。吾侍に対て。
けのふん半七夫婦に逢ひね。彼ホ去歳の秋。和泉の堺にて陶が
逆乱を伝へ聞ひ。日をうでて途をひそで。周防を投て赴く程に。
泥多の新関に留られて。六ケ月の宿りをかさね。路費竭て御
ずとのみ。ありれどもこれも夏山も面影いくに変りければ。外母ありて
こも妹ありとも名告らねばいりでちるべし。半七のこ平太郎を

訝しげなりけるが。彼が心中を憂ひを抱けばとて。怪しと思へざりもあんなれば。ならねばならぬ隨ふまで。外ざまくその故を問へ。然ることのようなるに。周防の山口へ。勢ひ刀治同樹とのものを尋ねるとのよりあるなり。彼方へ。槐姫の先途をうけまわらせ。又風流士の宝刀を索出すべく。犯ち過を免されんと願ふべきべき。なられた彼宝刀のゆへ。舘順勝既に後悔しあひて。ひとひ捨ぬものなれど。今更これを求め出すとも。労ちるのみにて。その功なし。名告てゆの勢ひを告ちらせ。尊へ。わくまだ。どうひしぶ。彼方へ元来。その罪はあらどとゆへども。いまだ君ふり赦免をうけど。加藤廣も。あらぬ草葺よりの。ふれた夫婦を引入れるべ。槐姫のうへよ。又いふる禍のいでまるんとれも又影護しその行

わるは既に空つげの名告らずに立ヨられ。姫のうへよるのあらんとも。羊七は功を立さうと。刃の幅廣くするるあらんと。深念しこの外ありまくこれをあるる。ゴブ栄門さら定るよ出ぶ。呂懐ふるる関防牌面をどしたりと。物がくりあひしぶ。これもはじめてあれ。刃夫婦がうれた猿よ。手を超たるうをたるあらんとるさあはたれど。忠義のあるひうえて。呂一トしぶの音耗もえぜぶ。たるふいある月沼多の関の戸閑たるうろ。拒兼菴主のくるる。仙野呂東二ガ姫の往方を索まわらるに逢ひよけれぶ。豪て受たる計策を告ちらし。大江家の形勢をうえて来たまべとき。これをぶ多治比の郷へ遣し。彼人の為ありまべ。一圓姫君のあん俱しく。大和へ勢んとく。行程よ。呂東二ハ帰まべ。付るゆ中ん。

沼多の近郷にと恩劇るりよければ。姫君らよ在ちるうを人
ふやたちまたりけんちらば呂東二の殉り来るを待ちて。備前備中
までも延ーまわらせんとおひて主従が形状を変し。新尼ちを
前よ立ーて。拝義葬を生ーるよ母ーとのまーぐいーぐるらば野伏
忽地四方よ起ーて。新尼ちの隅られ。三原のめーもくーとるみ
いぐ。めーてれもくーされたちりとるる。却山口のうへまらば。野伏の害
を限れのうん見半七い氷上のやよりとはけばめーる時りーとそ。
才小功を立さちんとちのうーせうもーる荒口を殺脱主従ふうーたるる
ちどるも。昼い人るん樹蔭よ躯ま。夜のみ道をちうーつ。天神川の
ほとりまーぐ来たる折ぐんが外いい人よ養懲さるーて。その窓を窺ふ。
のうーちんが外を養りのいか沿同樹よとそあるん。這奴いらあらぬるめ

るるうー。前の菴主ぐ物ぐうりるうーたりぬ。うとゆる半七い風流士の
宝刀を索んのよ。彼と親子の義を結て今ちの呵責を受るふとそ。
槌姫を舎藏まのいたる尼よ。舊の夫ちとも。這奴を在ちば半七も
志を野ぐうー。姫君のうへのと危し。今忽地よ不意よ出そ。禍を断
ふたりーとちのふを思ふ。そそ同樹を砍流しぬと一五一十を物
うられい。半七ちぐーー歎息ー。外母園茶どのいさらー。平作とのひ夏ぬと
ひせるん稀る孝烈の才才婦をあちるぐら。半七のひかびるー。
ふ管宝刀を索んのよ。沿同樹よとらられー。彼ぐるとあるのうらば。
女房か花を賣られたる。体い箇様ーくと。夫婦が薄命を告
ちぐ。さるるそも悪棍の同樹が妻ふも又ゆる。真實の比丘尼ゆ。兵
送憾ーるん某夫婦眼ゆりるぐら。縦面彩い変るとも。外母と妹をそん

とも云ふべき料藪の女僧とのゝ呼ひて外ゝ〻〻立つられ後よ葬を索ね
たれば。沼多川の東村あり。さる柴門のあり。原来は信ずる辨財天の
現化〻〻。関をべ起さしめひりんと思ふも推量アて。再びは尋ざる者の
怠ゝそ面目ありれ。ゝられども半七が武運のまゝこゝ唱ゞて姫の先塚ゝ
めひきり。死をもて恩ゝ報ゝんとこれ平生の教ひゝと回答ゝ。或ゝ歎ゝ。或ゝ歎ゝ。我ゝ面ゝ見れ〻ゝべ槐姫ゝ今更ゝ憑ゝ〻ゝ拾ゝつゝ通諸花
半七ゝ花ゝ嘗命を賜ゝ。ゝゝ会話ゝ夏の夜の墓ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
旭ゝ高く昇ゝ。ゝ当ゝ半七ゝ窓の扇ゝ引めけて大ゝ驚ゝ長物ゝ〻ゝ
時を移ゝ〻ゝ。ゝひの外ゝ天ゝ明たり。ゝゝ姉同樹を殺ゝめゝ折。二人の
癖者左右ゝ立ゝ。事の〻〻体を張ゝ。一旦ゝ迹を埋ゝ。ゝ〻ゝ〻ゝ伴なゝ
ゝた。這奴ホゝゝ〻〻〻〻訴べ。ゝゝ〻ゝ虚ゝ主後ゝ小在ゝ〻ゝ薪の

上ゝ墓を覚ひ。燕ゝ異ゝ〻ゝ。天の明ぬ間ゝ〻ゝ姫君の快ゝ〻ゝ脱ゝ去ぐ
ゝひ〻ゝ。ゝ〻ゝ出ゝ〻ゝ使ゝ。ゝ此処ゝ久恋の家ゝ〻ゝ〻ゝ姫
君ゝ湯漬を進ゝ。主後物ゝ〻ゝ〻ゝ。ゝ〻ゝ道ゝ〻ゝ〻ゝ眉ゝ
火のつ〻く情牡つ。ゝ度ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
きの〻脱捨たる。ゝ布の単衣をか通ゝ被せ。か通ゝ単衣ゝ槐姫ゝ
被せ〻ゝ〻ゝ。半七ゝ長ゝ〻ゝ。刀を取て脇ゝ杖ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
外面ゝ〻ゝ。人の走り来る音ゝ〻ゝ門の扇を打敲ゝ分治ゝ〻ゝ
ゝゝ。朝寝ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻

雄君を奥へ渡し。さてあ通りに密語をう。緯既よりよりあとべつのまつよい
脱ぎ果べるものもめらど某い出牌とくもか。村長許起たてとるかものひと
らて。稚ぞ。ぞ。ぞ。

門の扇を。引ゝそんとゝるまを禁足と捕ゝ。ゝのゝゝびちゝたゝゝゝ。
ゝゝ宿よゝゝぶ来ゝるよゝけゝの翌のゝゝゝゝゝゝゝあらんや。抑ゝん身を
何ゝのぞと問つゝ猶ゝくゝゝゝゝゝゝゝ

同じ孝行とはいふを。世だてりの真似ともてくれど。特歩で辛い世の渡られど。近来組翁はたとまれて。ろくのゆゑに熟易く。律義篤実さらさと止て。濡れまゝの泡なる咽取り。本銭定まれど。固るとはいふるらべ何時でも手口ざれば馬はゆゑに騎てゑゑ人はゆゑ添とはいふとめり。手七はゆゑ。面識はあらねば。嫁にとはいへば鰯烹たる。鍋はゆゑ中やゝ臭い中。表波ゆゑ直と抱えてを。御除て。直り退めるみなあげるる白物りゆゑ。ゆゑくゑを出さべ。辛えめをえて。後悔せんとり。去ねと威しても。守りね態しゆゑ。王ゆゑ。嫁れさのこと難面宜ゆゑ。嫁れ出ると追立ても。そりり外は宿ゆゑ。手七が嫁れるらべ。面識はもるふべえものを。全体はん身は何処ら。何日又ら。何ともと問まて



忽地さて。詰り。無りねきべ冷笑ひそはられまでいはねとくはさべ出とはいへば言葉は角がろはいねはゆゑはゆゑ。情一日春〳〵。余はけて大誓文男風流はこの所はれども。第一は挿了で。小遣銭はゆゑ缺べ。第二はゆゑ朝起して。飯炊あはして家くを起さ。第三はゆゑ水を汲て。洗濯衣のゆゑ付ける。夫はすれば得要向。色ある返辞をはして。べと又引袖も倘事の敗はゆゑるべえと。はいへば今更りて水ゆゑ。掏られ〳〵さを笑はゆゑ分られそ思案の外とはいへど。〳〵はゆゑもえゆゑり。はん身はこの孫の力祢と宜はゆゑ仮るゑゑ。同樹どのこゑはゆゑり。半七はん身はゆゑ。假初るゑゑ親るらどゑ。その半七が嫁れるべ。るらはそ即はん身が伯母。その伯母を犯さんとて。不義はひゑゑるゑ畜生人はるゑ

の霊なるものとあり。死人のひあれば。五常の道絶たらざるもあれ。畜生と異なるらん。行ひざるあり。まりて。恥しむれば。うち笑ひさえ物くしれ。彼忌令禁忌繰りて。窘ちもひひ処さぬ互の誓言とぶ夫とせん。妻とせんとて。正しく購し。壻引出をば。忘れ欲と抱留まれ。ゆうやうに掻遣りつつ。ろろねるあいるよげあめくけのちめく。物のひんと何をか絶らん。酔よ紛きて欲さるぐる。根の言突くいとあるの。とのひつも又走り退くを。巻りもさぶ帯引留ぶれ證据めるものを。今更よ難きてい一分たぬ男子の意持られてもるの詳ふ。とのひも果ぶよ遠く。懐ふりぶ。隻足の桐の下駄の真中。打ちし弁ハ。胸よあがえのるはを。いいぶもあらられて。それと。ぶりとぶ口隠さ。やぶ目前了

衝著ひ。ふられをくもえよ。神を誓ひの天神川。交と欲ちひ水潜せ。壻を祝ぐ背風流。赤逢ふ辺の像見ぶと。打ちあくく絡る弁を。受たるか駄い今宵の嶋墓ひあたる。嬬夫の道を。潜たくぶとくれしりのを。難而君ふくありじと。下孫ふ。あたる恋るらで。今ぶ読しる身の仇ふ。お通ハ結ふうら。も騒ぶ。その弁の引出物ひるく如くあがえのりつん欲してたふあらぶ。嬬夫の縁しを結びもせんが。木を伐りのハ斧をりて。娶るりのハ媒しふ孔迭ふ浮気の轉寂ハ袷蒲團の薄情二扶の間より。秋風たちて。未遂ぶ。半七が渝りて後ふ。彼ふも縁由を告ざて。媒妁を雇ふ。とぶ羊ハさぶ欺を掉。ハる羊晌も延さんぶ。勿論夫婦の婚義ふて。媒妁もあるべ死若処を畏

をも世よ往くあり。ゐくと稱ねん待女郎。これこん奥なる槍姫引揚出
しく月よ物えちんと裳裾くゝ立あゞ出ゞおゝ通い吐嗟と携ゞ當原未
昨夕の戒勢を『一ゝら十まゞゝ〳〵ん果くゝ。たゝ〳〵よまゝゝ敗鐵全め。
羊七いるゞ実父全八とゞゝ仇人の一隻ゆゝ又祖父の讐彼も是も殺
さんど累る怨よ眼前槍姫ゞ首を刎くゝ陶殿へ進らもる妨ゝとゝ
丁と蹴る足を抱ゝくゝ些も殺さゞ。さゝてゝ彼処の敷居を一歩
ゐりとも踰さちゞ。ゝゐるよゝそゝれ主よ冊ゝ。赤根羊ゝ進ゞ長女通ゞ
余のゝらん限ゝゝ。姫君をゝゝ曳ちゞどゝつるかも女ゝのゝひゝさ。
偖ゝさんくゝ髪断離髪もゝも乱焼るる。懐剣晃ゝと引抜ゝ突
くゝれゞ刃を反ゝ。戯をゝる。と把くゝるゝ駄よ双を戛哩と打ゝ。怪ゝ
脇を斧へ揉揚。袋よ掛たる細紐をゝいゝりゝゝ、搦著くゝ柱へ



楚と繁ゞ苗ゞお通い頻りよ蹉跎くゝ。柳の眉を引たゝつ眼を
睜ゝ歯を切ゝ。朽をくゝ。羊七ゞ宿よ在らゞゝ。まゝ曳ゞみ
小ゐゝゞ玄蔵くゝ敵の双のゝを。ゝ遍欲脱ゞくゝ。ゝけゝ呂つゞも。
残忍ゝ頼の悪棍よゝ。ゝゐれゐん。姫君のゝ運の杪。黙く
ゐゐゐまりゝ。戚莫生ゐゞくゝ。ゝ夫とゐりくゝ著まつり。姫君を
救ゝくゞゝゝ。このゝ羊七ゐゐゞくゝ遅ゝ風まつ祖ゐる燈の花ゐゐゐ
危ゝ。姫君のゝん余を助る人ゐゐゝ世ゐくゝゝ口説つ刃を起し。
支らんとゝれゞ縛の索よ牽るゝ意馬心猿ゐゐゐゐ哀まゐる。
その隙よ全双い緩ゞくゝ帯を結ゞくゝゝゝ裳を引折ゝ双を引
提ゝ。ゝくゞゝ通よ立ゞゝゝ。赤根ゞ長女汝ゝ祖父同樹ゞゝ仇人
ゐれゞ。第一よ首引抜ゝゝ。ゝゝ奴ゐれども。今ゝゞ活くゝ。

槐姫が首をつんせ。飽まで物をありひとりんいでや姫そと。踵を廻らし。納戸へ急ぎ入らんとする。背より聞る門の扇の音より佶とえうろ〳〵。ゆく〳〵ものの羊七よみと向ても果ざこの秋物より奮然と走り入りぬれを羊七とちる汝ハ。お花が迎の私平べとて仍り来り。同樹が駿計の悪棍るよ。女子とびひ偽りて。姉をちらく〳〵縛する。とも。とれ今とよ汝こそ来つれば。物とらんとちる昼鳥奴さそみ狡計違ひけんと罵るに眼を瞪ら。盗賊とハ過言なりこれを誰しろ。とふらん。相合橋のほとりまく。汝が父より頼まれてる。今市金八郎が落胤同苗全なるをちらどや。親ならぬ親より孚まれて。浪速より人とるしるべ近ちろこ。めて〳〵ゆるが実父の。仇人を赤根と傳ゆて。更より大和へ住宅を結ぶ。櫟本の松原まで。羊七進を狙ひ。

微運すく素意を果さん。友ちろそのこれ風流士の大刀を追ふ。この処へ来てとハ。亡母の継父なる刀冶同樹より聞會汝ちよ在るをちれまで。ちれば今の羊七も。ぶみよ仇人の一度まぶられを。知まとろく。聊亡父の孝艱より。佞んものを。とひ〳〵べ更閑て。侯天神川の。水逆さまより流れ。とを。却汝ホ祖父を。贈〳〵たる怨をちより。復んみよ。汝が姉より辛ひめ。ゼ汝ホが主と仰ぐ槐姫の首を刎く。汝が内るを行んとちより拒ぶも。夏虫の。火虫より似る青蠅ども。押並べ。蟹殺さん。覩念せ。と。嘲ひ猛く。罵るゼ羊七。顛然。とち笑ひ。原来汝ハその苛不忠非義のやえ。ハ。父より。頼れたる。入主八が。まるり。欲。天罰。脱れ。ど。落余ちハ。汝が親の自業自得。とちひ。ひ。復讐。

人々手〻に罵る人傷痛し。主と親しき冠をるん汝をいかで殺べた。刃を受くるとぞ。まきつ。袴の左右を結めげく。紋の間へ挾めて。全次郎は怒る。立盃の戯言吐んとて念仏まうせと跳りつく。砕らんとされば半七も。拔めつく丁く裝束と烈しく打めの渭音い鍛冶が鑿と異ならで刀尖うて火花出し。一上一下の煉の右刀風のあり玉巻〻。受つ流しつ戦へいか通い傍小阪さの〻る目ぐるく立つ居つ。刃をかをそそんとの。岩のうら縛の窠より引れて輾轉又刃を起しく立つうを妨さるる。と全次が足を払して礫と跳る。矣所を撲さて苦と叫び撞と倒れて起もいで活処より外面へ。士卒百人あまり初て。いかめく。先を追つ。親首桶に抱て治が門ちく。いでるるのの別人ならど。どられ陶五郎隆春。今茲廿歳の角前髪より身長高く人品秀。大和錦の陣羽織より金作の太刀を佩。三平草の身甲より鹿皮の行縢して。十王頭の臑楯より。路踏ちる意気揚〻。凛然として門邊より立在とく打入れと下知すれば。先陣なる兵二三十人。ちらくと走り懸て打めの刃を割て入陶殿の嚴命なり。洗ぎ出つと推隔て。半七と全次を左右へ引て押取巻び全次が歯欠切て。半七が今さらより匂うち騒げど網裏の奥且く息を吹てをり。当下陶五郎が。悠然として上坐より。床几を立さて尻をゆけ。刀治半七うけのられ。汝捲姫を舎藏よ。訴人めつて慥かれ。さるよりて。曩より村長許召うて。つの容を尋さるる言を飾て。音伏せば。一旦放へ。その不意より出んねく。身の仇なれども故主の息女人傳より。隆春うづから

向ふたり。槐姫をとく出せ。といそがせば羊七は怒る眼に涙を含み。
推参なり陶五郎。かるゞ父母の骨肉なれども。汝晴賢に類して
ふとこゝざる父兄に似ず。頗る養父が逆謀を翼て。相傳の主君を
害せば天と人と共に容さじ。誰か生るゝがらに。その災を食はんとを
恐わざらんたりとも。姫君とてもいまゝ捷姫を害しなば
謀るとも。姫君とてもいまゝ捷姫を害しなば
して信とするまゝ。過言なり羊七。むかしの兄弟。今は怨敵。弟の中の商
るをいかゝ。毎〳〵嫌除ざれば。その腐除がゝ。と古人もいひ君臣を
ゑる王塵玆の如くせられば。臣又君を讐とする。父子兄弟も
られなかるゞ。大内殿の滅亡いかゞ。拓〳〵薛するよりゞ父を逆賊と
罵るか惑ひなるかどや。そもそもまれかゝもめれ。槐姫にこよめらどと。

陳ずれいとゝ実すとして立向ふる隆春なれども。論ふを正しく証人
あり。厚倉隼人なり出よと引入られて外面より阿と怒ていそぎまたる
敗徴の四五六がたちめまの仏ね勇くして打扮。飾磨絆の四天と篠肱当
ゝて朱鞘の両刀ひつめく。禹歩と歩を入るを。全双いつゞくとこれを
ゝく且呆れ。四五六為らに出せるゝ。といのをば絶てゝもゝらで。
羊七ようち射ひ槐姫と冊たて。父と共に兼洛と勃れそ。
直さにこの地へ来たれば汝いこれをゝえ忘れゝん父二郎大夫が子まう
ゝ後。不覚に渇酒小身をゝら崩しゝ。鶴峯を逐電し。浪華へ
いたりゝ敗徴の四五六とゝりさゞをたれども。去歳の秋又こゝへ
立向ひ。今陶殿に荷擔しゝ。ひゝの武士と立向ふ。厚倉東人友吉
奉ゝめまちめ。槐姫の訴人せ。證拠いこれそとゝ生とを夜べ

半七主従を抑留して隼人
桜姫の首を陶五郎に献ず
あつ宮隼人
陶五郎



半七
入主従
かつら

打ちけたる半七が刀より附たる小刀まるより。半七いこれをうけ。拳を握
歯を切て。原来汝い二郎大夫の一子隼人なりけるよ汝が大和よ在し
日ハ。これ総角のころなれば。その面影をよくも認らざ。曩よりそこれ
なる全姿と示めして。小侯ようの使と偽り。女房お花を奪ひ去り。
今亦槌姫のあん在所を。敵へ告てその死を促し。揃ひよ揃ひ
大自物半七が刀の目釘のはずれあん程い殺死ちん。そとる退そと。罵て
立めらんとされば陶五郎。這奴打せえうと下知するよぞ。推取巻
たる兵ホ。揚る谷よ半七い。背后腰。乱打よ打悩されて倒まり。
厚倉隼人られをえて。呵々とうら笑ひ。楽内知さる納戸のうち。
ひそ姫君のあん頸をあらんとひらけて。ずて奥へ走り入り。且く
して声をあげ。丁と打うる大刀音よ。半七い只気も半乱が通もあ

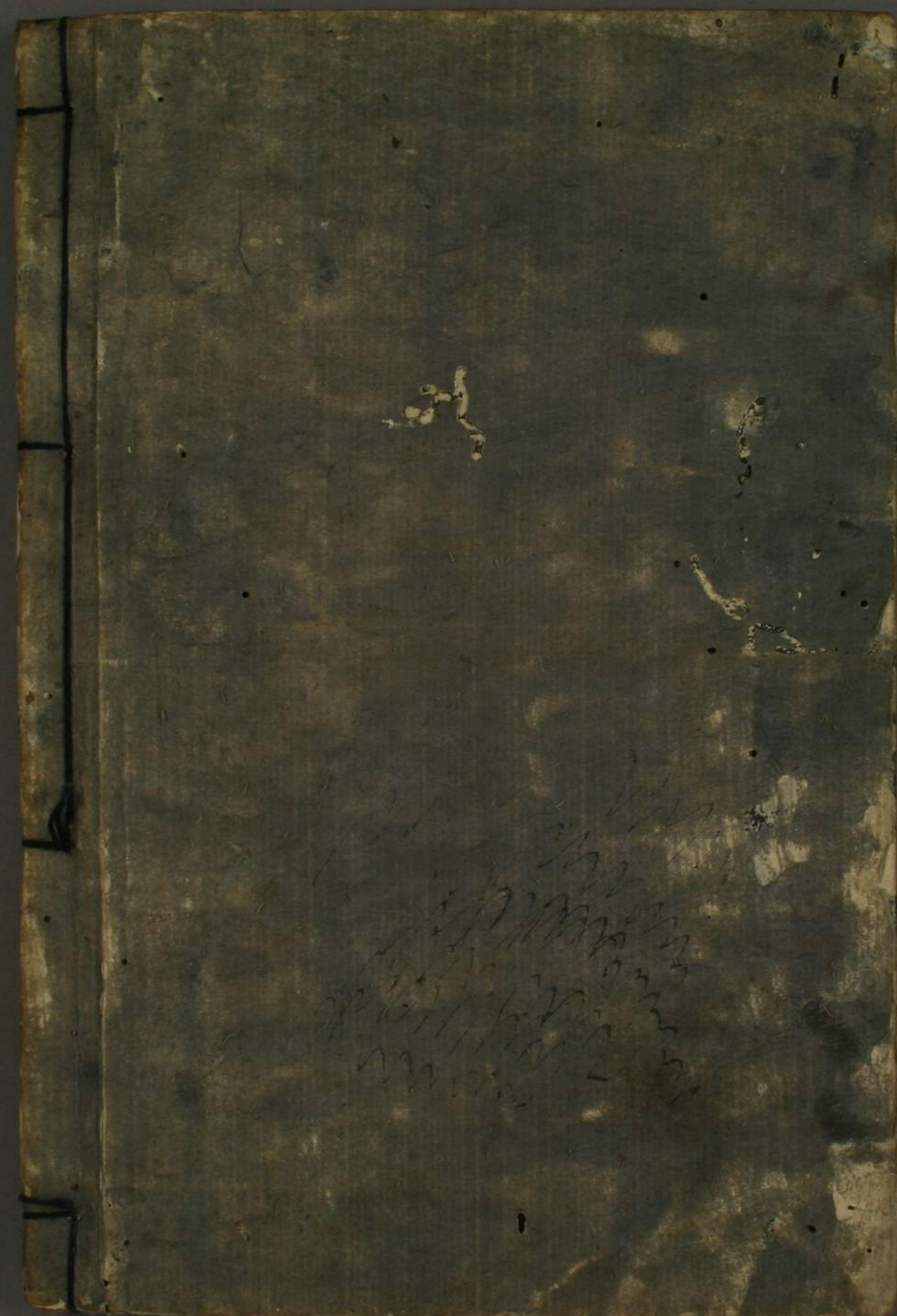


牙を起せど。縛の索と数ケ処の撲傷よ。御弾丸以矢傷の鳥
兵音ホるぞ。陸ゆ。ずて。初よ厚倉隼人い。鮮血下乗槌姫の頸を
引提て走り出。豫て納戸よ舎蔵たるを。某曩よ背門より張ひ。
その巣をびらくちりつ。殿のざ実撿しゆへとほとりうふさ生ん。
姫の首級を陶五郎。ごらんかうえて莞爾とうち笑こ女流ゆれだ
義基の北の臺。続井須勝の女児なれば生かべ後日の禍胎。
父頭よ。ひを弔ゆひたるよ。ひ辺の忠誠よりて忽ち頭を獲たり。
されい此度の勸賞よ。父二郎大夫が舊領を。返ゆ与る所。富田の
和歌山よ在住ゆ。なれ忠勤を励るべし。と説示ゆ。携たる首桶へ
姫の首級をこうり納よび。厚倉隼人額をつたるれ向後も郎君の
吹挙を願ひまると。媚る言葉の尾よ。ようて。全姿い親を改め某も

又彩ひあり。嗚呼がまくいあぼさんがと。半七まい舊怨あり。某が実父全八郎へ二十四ヶ年前よ赤根半之進小勢れ。又祖父同樹こそ。昨夕お通よ頼またり。曩よ養母の遺言よりそいまご宿志を果さんとのへども。彼も又仇人の一度なれば。半七を撃とりて聊亡父の孝親よ供ん。とする折から。高貴の未臨便なりて。どひの外よ抑留せらる。あらん君。既よ兄弟の義を絶ゆ。半七お通を某が。ゆるしなり。とのへども果ど陶五郎へ眼を睜ゑ声をあり立ての白徒胡乱なり。復讐よ式作法もめ。べよ當の敵を撃ずして。その。ゑを撃ゑ。ゆるよ這奴へ野伏山客なんどなれども。四ヶ岡の主改代の時を窺ひ復讐なりなんどのへらら。名を取り緑を貪んと謀る癖者まそめらんぞ。這奴薄ら。べ全效直と呆ゑつ。頭よ隼人をえゑるにそ。厚倉へ傷痛くかそるく小藤をすくめて。陶五郎よ射ひいる。郎君彼へ某浪速よそ。他支なりも交参たる。敗識全效とのふりのく。時と物とを辨へ。めろく復讐のゑを形ひまうせへ。越度よ似ゑまども。別よさそる伎倆へあらべ。只友善が面よ覩て。全效を許しゆへ。と言葉を唱へく勸解しべ。隆春ゆうゆ面を柔げ。ならべこの全效をべ。隼人川辺よ領くべ。のくよ半七彼処よ縛られたゑお通るよ。汝も主の相伴よ首刎べ。奴なれども。肉緑の好こ。一旦へゑ殺さそ。志を改めく。ゑべ父よ降参べ。隆春ゑ汲ゑ引して。世間黄くなりてゑらせん。物ども続と。徐ゆよ首桶を抱へつ。床几をそなれて立ゑまへ。前駆後從の猛卒力士殺ひ冊く

威儀堂々たるらども全及ハ厚倉ゟ伴れ。ゝくを目送る半七が腸を断送恨の涙あるゞ恨こハ姉か通暴虐非道の牙隆春。荒ゝ謂る厚倉隼人彼此共ゝ主の仇何処までも遣べたぞのを追続て菅笛んと力を杖ゝ半七が心ばりハ早れども。節〳〵痛む魚屋の雑煮ハ細ゝゟ野の猫の花壇ゟめゝゝ浮世の嵐。蜘蛛の夢欲幻の形いうつゝゟ同胞が外面古ぢゝ眼つ。納戸のかさを入ぬ。

胴を打ちぞ歎たゝる。

古夢南柯後記巻之七終

本久所有